

浦西和彦先生インタビュー

秦 重 雄

本稿は、二〇一七年九月一六日に秦重雄氏が浦西和彦氏に実施されたインタビューです。秦氏および故浦西氏ご遺族のご了解のもと、「ここに掲載することとなりました。このインタビューは、二〇一七年未に、一部の関係者に送付されました。冒頭の「みなさまがたへ」はその際に、インタビューに添えられたものです。当時の状況がよくわかりますので、このまま掲載することとしました。(編集部)

みなさまがたへ

とお元気なお声で明るくお返事をされました。

二〇一七年一一月一六日、関西大学名誉教授、日本社会文学会会員の浦西和彦先生がお亡くなりになりました。

二〇一七年の九月上旬に和田崇さん(三重大学)からご連絡

があり、浦西先生の御体調が相当お悪いことを知りました。すぐ浦西先生に電話しました。

「手術ができないすい臓がんになつた。『延命措置』はせんといてくれ、なりゆきにまかせる、と医者に伝えた。まあ、一年後か、三年後かにお迎えがくるやる。」

インタビューの文字起こしはひと月もかからずできたのですが、細部を調整してから浦西先生に見てもらおうと置いておきました…。

一二月上旬に東京の大和田茂さんから連絡をもらい、浦西先生の訃報を知りました。実は同日に八五歳の叔父がなくなり、三日間ほど新聞の訃報欄を見る余裕がなかったのです。また、浦西先生のお言葉には「一年後」はございましたが、「半年後」はなかつたので、インタビューの文字原稿の完成は二〇一七年中でも…という認識でした。

二〇一七年が終わるにあたって浦西先生の生前インタビューを完成させて、御関心ある方々に送ります。浦西先生の語り口を出来るだけ活かしたつもりです。

なお、生前インタビューの公表につきましては浦西先生から許可は得ておりました。

御参考に…「新刊紹介」（秦執筆）浦西和彦著『文化運動年表

昭和戦前編

（『社会文学』第四六号、二〇一七年七月）

「書評」（秦執筆）浦西和彦著『著述と書誌』全四卷

（『社会文学』第三一号、二〇一〇年一月）

秦

お体に差し障りのない程度に質問させて下さい。

関西大学を卒業されて岐阜県坂下女子高（現在の岐阜県中津川市坂下の坂下高校）へ行かれたのはなぜでしよう？

浦西

関大の学部を卒業して坂下女子高に行つた。当時は、小さな町で岐阜県と長野県の県境にあつた。いい所であつた。就職部の窓口でたまたま岐阜県の教員募集があつた。安保闘争の後で、田舎で暮らすのもいいなと思っていた。高等

学校なのでもつと大きな所だと予想したが、土地勘もない場所で、新しい女子高だった。住むのは良い所だった。行き手のない教師だとか、新採用の人だとか、自分の様なよ

インタビュー

二〇一七年九月一六日（土）午後から約二時間。

浦西和彦先生宅で。聞き手は秦重雄。

○浦西和彦先生のご経歴

（日外アソシエーション刊『日本プロレタリア文学史年表事典』二〇一六年の奥付による）

一九四一年大阪府生まれ。

一九六四年関西大学卒業。

関西大学文学部教授。

二〇一二年定年退任。

そから來た人が多かつたと思う。校長が面接の時に、島崎藤村のゆかりの地が近くにあるので国語の教員がこの学校に來たがる、と言つていた。まあ、行つて良かつた。

秦 先生と岐阜県とは何かつながりはあつたのでしょうか？
浦西 全く関係はなかつた。もともとどこでも良かつた。たまたまだつた。

葉山嘉樹と出会つたのもたまたまだつた。坂下は岐阜県

だが、木曽川を越えると山口村があり、葉山が晩年住んでいた。坂下とも行き来していた。学生時代にプロレタリア

文学は多く読んでいなかつたが、葉山嘉樹を読んでびつくりした。昭和一〇年代の作品にも葉山には良い作品がある。何とかしないといかんと思つた。すべて偶然だつた。

小さな学校で文芸部があつて雑誌『友樹』を年二回出していた。顧問をして葉山嘉樹の特集号を出した。学校で葉山の特集をするなんて無茶をしたが若いから出来た。三〇〇部くらい出していた。顧問だから年二回は何か書かないといけない。ということで葉山を調べ出した。

一九七五年発行の『葉山嘉樹全集』は小田切秀雄さんが筑摩書房に話を付け、中野重治さん、寺田透さん、金子洋文さんが編集委員となつた。編集と章立ては全部自分がやつた。良い作品がたくさんあつた。

それ以降は、目立たずに良い仕事をした人、里村欣三や伊藤永之介などの『文藝戦線』派の文学者を主に調べてみた。

今は、プロレタリア文学というより、文学そのものがダメになつてしまつた。ほとんどが読まれなくなつてしまつた。あの当時は小説を読む文学青年がいたものだ。文学全集、個人全集が編まれ、文庫本も多く出された。今は推理小説の作家しか文庫本にならない。国文学をやる今の学生は三島由紀夫も、川端康成も、大江健三郎も知らない。

秦 田舎では資料集めは大変だつたでしよう？ どうされたんですか？

浦西 独身だつたから、夏休みに四日とか、一〇日とか、まと

まつた時間を取つて、国会図書館にこもつた。あの時は安い宿が相部屋であつた。（秦：相部屋があつたんですか！）出張で東京に来る人が利用していた。毎年夏休みは国会図書館に行つていた。当時は近代文学館がまだなかつた。（秦の注：日本近代文学館の開館は一九六七年四月。）

当時の国会図書館は昼休みは出納しないし、一回に三冊までなのでずいぶん不便ではなかつたですか？

秦 その代わり利用者が少ないのでわりと回転が速かつた。

浦西 案外のんびりしていた時代だつた。大学にかわつても、学会に顔を出さずに、国会図書館（後には日本近代文学館も）に入り浸つていた。出張で学会に行くことにしてた。でも学会に顔出しせず、出張費をもらつて国会図書館か近代文学館で調べていた。あまり人とのつながりを持たないようになつてた。たまたま人と出会うとこれを調べようとい

う予定がバーになる。めったに会わない人と会うんだから無視できない。これを調べようと思つて東京に行つて知つている人に会つたら話をしないといけない。知らん方がいい（大笑い）。そうして一〇年、二〇年過ぎたんやな。

雑誌を調べようと思うと大阪でも資料がない、結局は国会図書館に行かない。あの時代は雑誌の復刻版がなかつた。近代文学館が『文藝戦線』の復刻版を出してくれたのが最初だつた。復刻版が出て来たから地方にいても雑誌を見ることが出来るようになつた。でもそれで原本を調べなくなつた。そういう傾向が研究者にはあるんやな。

あの時代の古書店は面白かった。揃いでなくともいろいろな雑誌が出ていた。今は出て来ない。出てきても高価な値付けをしていますね。古書店もしっかり勉強していますから。

なかなか光の当たらない、注目されていない作家をお調べになつたのはなぜでしようか？

浦西 葉山に出会つてまわりを調べ出したのがきっかけ。それと大阪に関係するものを調べ出して拡げてしまつた所がある。

谷澤（永一）さんはぼくの師匠だが、本や雑誌はもう太刀打ちできないと思つた。新聞やつたら勝てるやろうと。そう最初から決めてしまつた。谷澤さんの弱いところを考えて、谷澤さんは運動するのがイヤだから出歩かない。そ

れならと地方の新聞や大学新聞を国会図書館に行つてノートを取つていつた。今はマイクロフィルムや復刻版があるが当時はなかつた。『文化運動年表』はその時のメモをまとめたもの。『読売新聞』なんかがそう。今やれと言つても出来ない。そつやつて積み重なつていつた。

大学新聞―帝大新聞なんかは案外面白い。わりと作家が書いていた。プロレタリア文学者だけではなく、普通の文学者も意外と多く書いている。逸文がいくつか出て来る。メモをするとおつしやいましたが京大カード方式なんですか？

浦西 自分用のカードを使つていた。大学図書館が新築する時に古くていらなくなつたものを全部処分すると言つてきた。古いカードケースを処分するくらいならとその時に貰つた。何台置いたかな。今は丸善も図書カードを置いていない。

そのカードケースに入れて整理し、カードで記録していた。整理の仕方は年代順ですか、作家別ですか？

浦西 だいたい年代順。図書カードは整理が便利。たとえば橋本英吉を調べようとしたら並べ直して組み替えるだけ。なりにより良かつた。定年退職の時にはそのカードケースの処分に困つた。家に持つて帰るわけにはいかないから一番頭が痛かつた。結局は全部処分したが。なんせ、本と言うのは重いし、場所を取るし、整理しなかつたらある本もどこにあるかわからないし、ないものと同じになる。

定年退職の時に、家の本と大学の本と全部一緒にあきた文学資料館に寄贈したんや。どんなどこか知らない、行ったことがないんやけど。おさめときや何とかなると。将来、必要な人はどつか探してくれるやろ。伊藤永之介も『種蒔く人』も秋田やら、一番いいかな。

秋田県立大学の高橋秀晴さんから「浦西さんから寄贈さ

れた。少しずつ整理しています。」とお話しいただきました。二〇〇九年一〇月の社会文学会秋季秋田大会はあきた文学資料館で行われました。

浦西先生と谷澤先生とはどういう御関係なのでしょう？

浦西 谷澤さんはいろいろと学んだなあ。坂下の文芸部の雑誌を谷澤さんに送つて認めてもらつた。坂下に行かなかつたら近代文学の研究をやつていなかつたかもしれない。『文化運動年表』も『日本プロレタリア文学史年表事典』も一〇年、二〇年の蓄積じやないですよね。

浦西 日外アソシエーツは定価は高いけど売れない心配はない。一定の部数を確実に売つている。

『文化運動年表』も『日本プロレタリア文学史年表事典』も五〇〇年、一〇〇〇年残る業績ですよね。それを見越し

て日外なんかは出版したんでしょうね。

浦西 最初は、『文化運動年表』も『日本プロレタリア文学史年表事典』とをセットにして本作りを考えていた。組み方がうまくゆかなくて、別々になつた。

『日本プロレタリア文学史年表事典』は校正の段階で事典してくれと注文された。あわてて事典らしく体裁を整えたけど困つた。事典なら売れる、図書館が置いてくれると判断したんやな。

浦西先生には複数のテーマがあつてそれを追求されてい

る。

浦西 やつてみたいテーマがあるけど、昨夏にガンだと言われて結局は時間がないのであきらめなあかんかった。ガンだと宣告されて映画化された文学作品を調べようと思つた。やりかけて調べ出して昭和二年位で中断した。うかつだったが、映画化されたものがすごい数にのぼることが分かつた。吉川英治や菊池寛やの作品がすぐに映画化される。映画が娯楽やつたから。大衆文学は映画化されていった。自分の残された時間のあと一二、三年では無理だと分かつた。思いきつて止めてしまった。ともかく膨大な数だった。

浦西 文学作品と映画とではどうしても映画の方を下に見る感覚が研究者にはありますね。

浦西 最初から今映画の様ではなく、チヤチなものだつたから。『金色夜叉』は一番映画化されている。芝居のセットを映画にした。

大学を辞める前にテーマを震災に絞つた。どういう発言を文學者がしているか、調べ出した。やりかけて福島の震災やろ。原発事故がどうなるかわからんかったからやめて

しまった。原発のことは終わることがない、永遠のものだから。神戸の震災に絞つとけばよかつた。関東大震災でも集中すればよかつたかも。関東大震災はほとんどの文学者が体験している。死んだ文学者は一人だけだった。書き手が残つてくれたから出版の復興も早かつた。菊池寛は悲観的だつたが。関東大震災はそれまでの近代の矛盾がいつぶんに噴出したもの。大震災が無かつたら昭和の時代はもつと変わつた。大震災で負債をいっぱい抱えて無茶なことをし続けた。今は建物の造り方も人々の意識も大きく違う。あの時は火を点けっぱなしにして避難したんやから。でも今は地下の影響が怖い。あの時は地下の心配はしなくて済んだ。原発の心配もしなくてはいけない。本当に安全なんかと。

秦 それはそうと『温泉文学事典』は今迄とは違う着想でしたね。

浦西 当時は冷暖房がなかつたから。文学者は寒くなると熱海とかの温泉に行き何日も籠つて書いていた。多喜二も温泉に泊まつて書いていた。きつと長いものを書こうとすれば家にいれば家族もいれば用事もできる。あの頃は旅館も安かつた。梶井基次郎の旅館も粗末なものだった。あまりお金持ちでなくとも泊まることが出来た。文学作品には意外と温泉が出て来る。角度を変えて拾つてみたら面白いやうど。出るのが時間がかかった。入稿してから出版まで

が。著作権の問題が出て来たから。要約は著作権を冒している、という考え方が広がつて來たから。司馬遼太郎の要約が遺族から訴えられて裁判で負けたからビビツてしまつた。作家の文章を載せるわけではない、事典やから、というのがこちらの言い分、本人が生きていりやどうつてことないんだが。『石川近代文学事典』で後ろに文学碑の一覧表を載せた。室生犀星の文学碑の俳句を載せたんだが、遺族が訴えたよつてに問題になつた。本人がおりや、かえつて喜んでくれるのに。売れる本でもないのにビビツてしまつて、『温泉文学事典』は出るまでに時間がかかつた。温泉が出て来る描写は引用が出来ない、短歌や俳句は引用しないといけない。弁護士も仕事がないからいろいろ言つてくる。長い引用はひつかかる。

秦 あちやう、あらう、広い世間ではそれほど厳しくなつていたんですね。

浦西 非営利の一般的な学術書ではなかつたら、ひつかかつてしまつ。犀星の著作権が切れる直前だつたから。それでなれば家にいれば家族もいれば用事もできる。あの頃は旅館も治体のH.P.には短歌・俳句の全文を載せたコーナーもあるのですのに。

浦西 それと旅館の悪口が書いてあるのは営業妨害になつてはいけないのでカットした。

作家にとって正直な気持ちが現れている箇所を我々研究者は当たり前と思って引用したいんだが、そういう所を削つた。面白みがなくなつてしまつたんだが、『温泉文学事典』は一番売れたんじゃないんかなり、再版が出たから。個人文学事典は出しにくい。個人情報を冒すと言わられるから。へんな時代になつてしまつた。生きている人の生

家が生まれた。今までになかった現象だ。庶民の文化が高まつていった。プロレタリア文学の革命はソ連や北朝鮮のような社会を目指したのではなく、もつと夢のある理想社会を目指した。今は否定的にとらえられているけどプロレタリア文学があつたゆえに庶民の文化が豊かになつた歴史的事実は消すことが出来ない。

年月日や出身学校のことは載せられない。『文芸事典の時代文学事典』の時は、俳句の同人に往復はがきで本人の経歴を問い合わせたが返事をくれた。石川県のアレで懲りた

現代社会ではプロレタリア文学に書かれているような現実がいっぱいある。電通の過労自殺がそうだ。労働組合がある時代にプロレタリア文学の時代の悲劇がなぜ起ころのか、不思議だ。

我々の学生の頃の何でもない事が通用しない。時代とともに変わつてゆく。まあ、それを使って悪いことをする奴が出て來たからね。震災などテーマごとだつたらまだ大丈夫かもしない。

昭和の時代と今の時代はちがうんだが、現代のプロレタリア文学が書かれないと云はない。もっとも書いても社会の方がどんどん進んでゆくから書くのは難しいやろな。

一九八六年に『日本プロレタリア文学書目』が出版され

話はプロレタリア文学に戻りますが、タリア文学の魅力はなんでしょうか？ 今後に残るプロレ

たのはびっくりしました。プロレタリア文学の単行本ではなく、プロレタリア文学に関わった作家の一九四五年まで

浦西

いか。それも東京だけではなく、地方でも若い書き手が生まれ、それが革命運動と結びついてゆく、きわめて特別なものだった。従来、本を読むのは知識人中心で農民や商人には贅沢品だった。しかし、プロレタリア文学が生まれてから、本を読む人が増え、大衆化が進んだ。それどころか工場で働いている人も文章を書くようになり、そこから作

プロレタリア文学の研究と言うことで多喜二や百合子をやるだけでことを済ますんじやなくて、例えば、林房雄とか藤森成吉も沢山の本を出している。それらをなんとかまとめてみたい気持ちが強かつた。

た。プロレタリア文学の本を集めることに集中した。谷澤さんは、「本を貸してください。」といえばすぐに貸してくれるんだが、それは一切しなかった。自分の手で集めた。

他人の手を借りてはだめ、ここだけは！ って思つたんやろな。

谷澤さんの家に行つたら家じゅう本だらけで、書庫を見たら絶望的になつた。こんだけあらゆるものが集まつてゐるのに自分はどうしようかと考えた。一ヵ所だけ徹底するしかない。

東京の青山毅さん（一九九四年没）とも近代文学館でよく一緒した。青山さんもプロレタリア文学に関心を持つていらいました。きちつと整理されていましたね。

文学研究は無くならないと思うのですが、有効性はなかなか認めてもらえませんね。

浦西 近代文学に限らず、古典の研究でもこの人はすごい、という人がいなくなつた。『源氏物語』の研究でもそうだ。目先のことばかりやつて、科研費にあたるかどうか、そればかり心配している。何十年かけてコツコツやる研究が無くなつた。國の方針は良くない。近代文学の研究もそうだ。国文学研究にお金を出さなくなつた。そんなものは好きな人がやつておればいいので税金を投入してやらんでいい、

という考え方。自然科学だけでいい、と言つている。

秦 文学研究は人間の研究だから「役に立つ」と思うのですが。浦西 吉田精一の時代は大学で近代文学を教えなかつた。京大

もつい最近まで近代文学をやる人はいなかつた。古典一本やりだつた。高度成長で大学で近代文学の講座を設けるようになつた。

秦 細かい話ですが、学生時代にマルクス・エンゲルスを英文で読んだ林房雄や浅野晃はなぜあのよう転向をしていつたのでしょうか。

浦西 林房雄はまともに取り組む必要があつたやうな。才能があり過ぎたんだろう。『青年』は作家同盟に評価されなかつた。彼の転向はきちつと調べておくべきであつた。戦後は家庭小説・ホームドラマを書いた時期がある。三島由紀夫を惹きつける怪物であつたことは確かだ。一面、わりと素直な面もあつた。『越中谷利一著作集』を編纂する時に、この作品は実はあなたの作品ですか？ と聞いたことがあら。そしたらそうだと認める返事を寄越した。案外素直な人だという印象を受けた。

浦西 越中谷利一とも岐阜つながりでしたか。

浦西 そう。『岐阜文学』をやつていた大牧富士夫さんがなくなつたことを知らせてくれた。越中谷利一は戦後は俳句の方向に行つた。会つたことはない。亡くなつてからのつながりだ。江口渙との関係が強かつた。越中谷はナップに参

秦

加し、江口渙もナップを行つた。

京都に三月書房という有名な新刊本屋があつて、四〇年前に古書を集めだした時に店主の後ろの棚の高いところに『越中谷利一著作集』が一冊置いてありました。それで、古書ではなく、新刊本として『越中谷利一著作集』を購入しました。

浦西

一段組み、七〇〇ページの大冊だった。手書きの原稿でコピーは青焼きの時代だった。箱は大変シンプルなものだ。

秦

森田草平を研究されたのも岐阜つながりだつたんですか？

浦西

やつぱり岐阜つながり。坂下高の文芸誌『友樹』で特集をやつた。そのまま進んでいたら、漱石関係、その周辺を調べていたやろな。まあ、葉山嘉樹を調べてその方向には行かなかつたけど。草平には面白い作品がある。部落問題

を扱つた『輪廻』もいい作品だつた。草平はだいぶん集めた。漱石をやる人は多いから、漱石とその周辺の人たちの調査は一時やろうと思つたが結局はやらなかつた。

秦

江口渙は『わが文学半生記』の中で森田草平をクソミソに書いていますね。日本共産党の同志なのに。草平の日記を読みますと共産党に入党してから大変誠実に党活動を行ひ、勉強もしていますね。

浦西

真面目なんやろ。覚悟して入党したんだろう。

秦

草平の『私の共産主義』に入つていな文章も少し集め

が入ってきた。良く出来た。四巻本だった。

秦　　のちの『日本の原爆文学』を編むきっかけとなりましたね。

浦西　今は個人全集は出ない。インターネットの青空文庫が出たもんやから本が出にくくなつた。文化が進むのはいいことなのか、難しい。

青空文庫は便利なことは便利です。スタンダードな作品

ならわざわざ本棚を探さなくてもすぐに読み返すことが出来ますから。

全集では最近『谷崎潤一郎全集』が中央公論社から出ていますね。谷崎潤一郎と江戸川乱歩しか個人全集は売れない時代になつてしましましたか。

浦西　中央公論社は良く出した。でもあの全集は書誌をきちっとしていない。きちんとする人がいないんやろな、谷崎の研究者はたくさんいるのに。谷崎の書目はあるが初出をきちんと調べていない。全集というのならやつといて欲しい。いまの研究水準ならその辺のことはやつているもの、と思いますが、違うんですね。

河野多恵子さんは異色なんですが河野さんをされた理由をお聞かせ下さい。

浦西　それもやはり大阪の人やから。彼女は丹羽文雄のところに行くんやな。みんな左翼的な作家の所に行くのに珍しかつた。田辺聖子と正対。ある意味プライドが高いんやろな。田辺聖子さんは文学とは認めないと違うほどに。

大阪の人では、藤本義一や山崎豊子もしたかつたが出来

なかつた。藤本義一は映画の脚本を書いていて、藤本家に保管されている話があつた。思い切つて見に行けば良かつたが行かなかつた。

秦　　大阪のプロレタリア文学やその流れを汲む『関西文学』についてお聞かせ下さい。

浦西　『関西文学』は結局は同人誌なんやな。面白いのはプロ文系と織田作之助らが一緒になつて『大阪文学』を出したことだ。

秦　　『大阪文藝雑誌総覧』には明治の時代の『なにはがた』

が最初に載せられていますね。

明治の大坂文壇があればどんな感じだつたんですか。

浦西　京都や大阪にも出版社はたくさんあつた。京都は仏教書を出すのが出版社の仕事で文芸ものには手を出さなかつた。関西の一番ダメなところは文科系の大学を作らなかつたことなんや。若い大学生が文芸ものに手を付ける。三高・京大からしか作家は出でない。やっぱり大阪は商売人の街で出版社は文芸ものを出してもつぶれて行く。丁稚奉公のひとは文芸書は読まない。懐に入れられる立川文庫を読んでいた。江戸時代からの流れがあるんだが読者の層がまったく違う。

大阪はおばちゃんらが芝居を見に行く。その読み物を新聞小説が書いていた。新聞小説のとおりに芝居が上演され

奏

る。菊池幽芳や渡辺霞亭など新聞小説と芝居は密接な関係があつた。連載の途中から早々と芝居になつたものもある。お金にならない文芸ものは関西では育たなかつた。連載小説と芝居と講談で当時の新聞は決まつていた。やはり読み手がいないと文学は育たない。後に大阪毎日は芥川を客に迎えたがそれは大正も半ばを過ぎてから。

今みたいに流通機構もないし、全国ネットもないから文芸ものはやっぱり東京中心になる。それは昭和三〇年代から四〇年代まで続いた。

映画は違つた。京都でつくつて広まつて行つた。映画は大衆のものやつた。

文芸ものは金にならなかつたから若い人は、梶井基次郎もそうなんやが同人誌で発表した。だから当時の同人誌はレベルが高かつた。いまはどうなんやろ、村上春樹はうまい書き手と言えるけど文学作品としてはもう一つのような感じやな。

私も村上春樹は評価しませんが、世界中で読まれているので評価の食い違いに戸惑います。

ああ、もう二時間近くになつてしましました。先生のお身体にさわるといけませんのでインタビューはこれくらいに致します。どうも長時間ありがとうございました。